

『動きすぎてはいけない』

第1章 生成変化の原理 1-5 心身並行論と毒薬分析

なんかわかった気になる自分。実際には、難しい。ここが大事な気がするという箇所は、説明がまわりくどく長いと感じたり、説明が難しいと感じる箇所であった。

ドルーズ曰く、

・デカルトの『情念論』は、心身二元論の「伝統的」な原則に従っている。「逆転関係の原則 *regle du rapport inverse*」である。それは、精神が「能動的」になるとき、身体は「受動的」となって支配されるのであり、その逆もまた真であるという原則である。(P94)

これが、デカルトでは、「意識によって情念を制しようとする(道徳)」の根拠になっている。(P94)

→①と②の両方が原則として成り立つと考えている。ここでいう道徳は、①のことを指す。

①精神が「能動的」になるとき、身体は「受動的」となって支配される

②身体が「能動的」になるとき、精神は「受動的」となって支配される

・ところが、スピノザの場合は、「両者[精神と身体]の、一方の他方に対する優越を一切禁じている」。スピノザの「エチカ」では、精神と身体は、存在論的にまったく対等に、同じ出来事をそれぞれ「表現」するとされる。これが、心身並行論である。(P94)

→「優劣を一切禁じている」というのは強い言葉だ。

ドルーズによれば、「意識」されない精神の表現、デカルトの基準では「明晰かつ判明」でない「無意識」の思性もあるのであり、それは「認識」されていない「身体がなしうること」のポテンシャルと並行的である。「自らの認識の所与の制約を越えた身体の力を掴むことが我々にもしできるようになるとすれば、同じひとつの運動によって、我々は自らの意識の所与の制約を越えた精神の力を掴むこともできるようになるだろう」し、そうして「無意識」というものが、身体のもつ未知の部分と同じくらい深い思惟のもつ無意識の部分が、ここに発見されるのである」(P94)

→大事なところだと思うけど、表現が難しい。回りくどさを感じるが、それだけ厳密に言い表わそうとしている箇所。

ドルーズの時代において、「身体のもつ未知の部分と同じくらい深い思惟のもつ無意識の部分」への旅は、芸術と関連する麻薬の使用に共鳴する。(P95)

→「ドルーズの時代」の人々は、なぜそのような旅を求めるのか?

※1925年1月18日 - 1995年11月4日:20世紀という時代

麻薬の効果は、脳へのダイレクトな化学的介入によって惹起される出来事である。外からの脳の強制触発は、無意識の新しい作動をトリガーする。それはドルーズによれば「知覚しえぬもの」の知覚であるとされる。(P95-96)

→かなり危ういことを言っているように感じる。

フロイトの精神分析は、無意識に「抑圧」されている欲望の連関をたどり、その根本的な理由を探ろうとする実践である。それは、自由連想によって実現される(ことになっている)。(P96)

→どうも「欲望」という言葉がキーワードのようだ。麻薬部分の引用にも「欲望」という言葉が出てきている。さらっと出でているが、自由連想とは?

→千葉さんとしては、「(ことになっている)」ということにしており、自由連想に対しては、一定の距離を置いてい

るようだ。

→wikiによると、「自由連想法とは、ある言葉をきっかけに、心に浮かんだことを自由に連想していく心理療法やマーケティング調査の手法。精神分析の分野では、患者の無意識にアクセスするために用いられ、マーケティングでは、消費者の潜在意識を探るために利用される。自由連想法のポイントは、思考を制限せず、自由に連想させることによって、潜在意識や隠れたニーズを引き出すこと。」

ドラッギーな「知覚しえぬもの」の知覚は、器質的な現象であるにすぎない。それは、自分の無意識内の物語を理由として生じたことではないそれらを(幻覚や幻聴などの)素材にしてはいても。麻薬は、それ自体で内在的に存立する経験を、新しい無意識の風景を、外から切断的にもたらす。(P96-97)

→「器質的な現象」とは?

→wikiによると、「器質的」とは、「臓器や組織に形態的な異常がある状態を指す。病気や症状の原因が、目に見える形での構造的な変化や損傷による場合に使われる。反対に、臓器や組織に異常が見られないのに機能的な問題で症状が現れる場合は「機能的」と表現される。」

→器質という言葉からは、あまり異常というニュアンスを汲み取ることができなかつたので、意味を確認して意外だった。器質という言葉そのものに馴染みがない。

→「知覚しえぬもの」の知覚は、異常がある状態であり、ここでは異常が現象ということだとすると、知覚しえむものからの非意味的な切断ということか。切断された時点で、「知覚しえむもの」ではなくなっている。変容している?

無意識は、つくられるべきものであって、見いだされるべきものではない(P97)

→「無意識」という領域は見出された時点で無意識の領域ではなくなる?

麻薬は、ハイリスクではあるにせよ、無意識をそれ自身に内在的にする手段でありうるというのが、ドゥルーズ&ガタリの考え方である。「麻薬は、精神分析がつねに捉え損なってきた内在性と平面とを、無意識に与える(….)」(P97)

→「内在性と平面」?ここも捉えきれない。

次のように換言しよう。

何らかの対象を「一発キメるse camer」ときの、それ自らに準拠、ないし最短の迂回で再帰する内在理由、あるいはへ<アドホックな内在理由>によって、当初の無意識から、別のしかたでの無意識へと移行する。(P97)

→ここも大事なところだと思うけど、難しい表現。表現が難しい。換言しようという表現も、言い換えではなく、変換するようなニュアンスだと思った。

→「一発キメるse camer」「アドホックな内在理由」ということもよくわからっていない。

今この経験を欲望することの理由を、過去に(できるだけ)疎外させないこと。麻薬による知覚変容は、アドホックな内在理由のみにもとづく欲望の、ひとつのモデルである。(P97-98)

→ここでも「欲望」が出てきた。

何であれ「慎重さと実験という必要条件」を踏み外してしまえば、致死的な「オーバードーズ」になりうるのである。(P98)

→「慎重さと実験という必要条件」というこの姿勢を大事にしている。

本稿では、薬毒分析の背景へと遡行し、薬毒分析の側から分裂分析のそもそもの狙いに迫る、という考察を行うことになる。(P98)

→「麻薬」から話がどんどん進んで、「内在性」「一発キメる」「アドホックな内在理由」「欲望の<麻薬的内在性>」「薬毒分析」「精神分析」「分裂分析」と単語が次から次に出てきて、お手上げ。話題が飛躍していると感じるが、次回に向けての下準備なのかなと思った。

以上